

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 19 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370435

研究課題名(和文)過去の語りに現れるダイクシスに関する日仏英対照研究

研究課題名(英文)Contrastive study between Japanese, French and English on the deixis in past narrative

研究代表者

阿部 宏 (ABE, Hiroshi)

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：10212549

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：過去の語り中の時間ダイクシス、空間ダイクシス、直示動詞、モダリティ副詞、自由(直接・間接)話法と歴史的現在形の全体について、疑似主体現象という観点から、日本語、フランス語、英語を観察し、疑似主体の疑似発話行為という仮説を構築した。また、日仏英で一見全く同質に見えるこの現象について、3言語を対照させることで、日本語、フランス語、英語における疑似主体のあり方の相違を抽出し、その差異を生み出す各言語の認知基盤について考察した。各成果については、学会や研究会で発表し、学術書籍等に論考を掲載してきたが、研究成果全体については、専門研究書、および一般向け概説書の刊行に向けて準備を行っている。

研究成果の概要(英文)：We have analyzed the phenomena of Japanese, French, English concerning time deixis, space deixis, dictic verb, modality adverb, free (direct and indirect) speech, and constructed the hypothesis that it is a pseudo-subject's pseudo utterance act. In addition, with regard to this phenomena which seemingly are quite homogeneous in three languages, we have extracted the differences of pseudo-subject's status in Japanese, French and English, and the cognitive base of each language which creates the difference. For each results, we have made presentations at academic meetings and research societies and have published articles on scholarly books etc. We prepare for the publication of special research books and overviews for research results as a whole.

研究分野：言語学

キーワード：ダイクシス 自由間接話法 主観性 発話行為

1. 研究開始当初の背景

発話者を基準点とする言語表現である、時間ダイクシス (ex. 「いま」)、空間ダイクシス (ex. 「ここ」)、直示動詞 (ex. 「いく」, 「くる」)、モダリティ副詞 (ex. 「たぶん」) は、同一の時空間を共有する発話者と共発話者を前提とする会話に特徴的で、発話者たる作者と語られる世界が原理的に不連続である小説などの過去の語りとは親和性がないはずである。しかし実際は、以下の日本語「いま」、フランス語「maintenant」、英語の「now」のそれぞれの例に見られるように、小説の地の文に頻度も高く観察される。

(日) 今の彼の内部は自然のこの狂躁に、いいしれぬ親しみを感じるのであった (三島由紀夫『潮騒』)

(仏) Bien qu'on l'aimât tout à l'heure, on le haïssait maintenant, car il représentait l'Autorité. (= Although a moment ago they might love him, they hated him *now*, for he was the representative of authority.) (Gustave Flaubert: *L'Education sentimentale*)

(英) Bringing water from the town pump had always been hateful work in Tom's eyes, before, but now it did not strike him so. (Mark Twain: *The Adventures of Tom Sawyer*)

これらが発話者たる作家を指向するものでないことは明らかであるが、しかし他方で単なる誤用、作家の筆の滑り、といった解釈で片づけられるものでもないであろう。この種のダイクシスの中には必ずしも対応する文脈照応の表現に変換できないものもあり、また何より、通言語的に同様の現象が観察されるからである。つまりここには、発話者に還元できない特殊な主観性の原理が働いている可能性がある。本来は発話者を基準とする表現が過去の語りにおいて担う役割について日仏英の対照研究を行い、この種の現象に潜在する一貫した原理が見出せるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

研究代表者は博士論文「フランス語 plus ou moins (= more or less) と主観性 (仏文)」以来、Traugott (1995) らの文法化理論や認知意味論の主観化仮説に発想を得て、フランス語や日本語の比較表現、特に程度・比較表現起源の熟語 (plus ou moins, qui plus est (= what is more), encore moins (= still less),

「多かれ少なかれ」、「多少」など) における尺度の主観化、同語反復文、矛盾文などについて国内外の学会で発表を行い、各研究誌に種々の成果を発表してきたが、過去の語り中の上記の現象がやはり主観性顕現の一ケースであることに気づいた。つまり、過去の語りには疑似主体が潜在し、これが時間ダイクシスのみならず、空間ダイクシス、直示動詞にも基準点を提供し、モダリティ副詞を担う判断主体、自由 (直接・間接) 話法や歴史的現在形の責任主体として働くのではないかと。また、この現象において日仏英が示す相違は、疑似主体のありかたの違いを反映し、さらには、3言語の外界認知形式の根本的相違に対応するかのようである。

日本語、フランス語、英語のいずれにおいても、小説の地の文を典型例とするような過去の語りに、「いま」、「ここ」のような発話者を基準とする表現、いわゆる時間ダイクシスや空間ダイクシスが出現する。しかし、これらが作家の「いま」、「ここ」を指向するものでないことは明らかである。本研究は、語り中に潜在する疑似主体の疑似発話行為の仮説により、これらの時間・空間ダイクシス、「いく」、「くる」のような直示動詞、モダリティ副詞、自由 (直接・間接) 話法、歴史的現在形に統一的説明を与えようとする試みである。また対照研究により、当該3言語における疑似主体のあり方の共通性のみならず、振る舞いの興味深い違いに注目し、これが各言語における外界認知形式の相違に由来することを明らかにする。

3. 研究の方法

該当する言語現象について、テキスト・データベース、光学的読み取り装置、インターネットの検索エンジンなどを利用して、文字データの収集を行う。

過去の語り中のダイクシスの用法と本来的な口語表現におけるダイクシスの振る舞いとを比較するために、口語の自然な発話例を、文脈・状況を含めて収集することも必要不可欠である。このため、日本語、フランス語、英語のネイティブ・スピーカーへの聞き取り調査を行う。インフォーマントについては、日本人、国内在住フランス人および英米人に依頼したい。さらに、この中の適任者には、物語の創作、既存の物語における表現の操作とその結果としての文法性の変化の判定、作例の文法性の評価なども依頼し、データを蓄積する。

データ収集と整理のために、CD-ROM・DVD-ROM タイプの日本語、フランス語、英語のテキスト・データベース、光学的読み取り装置、コンピュータ、大容量ハードディスク、会話の録音用のデジタルレコーダを使用する。収集し整理した用例については、順次 CD-ROM・DVD-ROM の形態にして、研究者

間で共同利用可能にする。

口語表現における時間ダイクシスと空間ダイクシスについて得られた成果について、過去の語りにおける時間ダイクシスと空間ダイクシスへの適用可能性を検討し、暫定的な仮説を構想する。

ダイクシスを扱った研究論文や研究書を通じて、意味論、語用論、文法化、認知科学、言語習得関連の現在までの成果について考察する。意味作用一般について、現在までの研究史を概観するとともに、主観性仮説の点からの批判的考察を試みる。

暫定的な研究成果について、特に時間ダイクシスと空間ダイクシスと疑似主体との関係を中心に、国内の諸学会、および国際ロマンス言語学文献学会、ヨーロッパ日本学研究協会などで研究発表やワークショップ開催を行う。

4. 研究成果

過去の語り中の時間ダイクシス、空間ダイクシス、直示動詞、モダリティ副詞、自由(直接・間接)話法と歴史的現在形の全体について、疑似主体現象という観点から、統一的な仮説を構築した。

また、日仏英で一見全く同質に見えるこの現象であるが、3言語は興味深い相違をも示している。各現象について3言語を対照させることで、日本語、フランス語、英語における疑似主体のあり方の相違を抽出し、その差異を生み出す各言語の認知基盤について考察した。

上記の各成果については、散発的に学会や研究会で発表し、学術書籍等に論考を掲載してきたが、研究成果全体については、日本語、フランス語、英語を使用言語とする専門研究書、および日本語での一般向け概説書の刊行に向けて準備を行っている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計5件)

Hiroshi ABE, 「Saussure et la linguistique japonaise」, Saussure, le Cours et nous, Colloque international à la mémoire du centenaire de la publication du Cours de linguistique générale, 2016年12月18日, 名古屋大学(名古屋)。

阿部宏, 「ソーシャル・言語過程説・主観性」, 日本フランス語フランス文学会・2016年度秋季大会ワークショップ「ソーシャル『一般言語学講義』の一世紀 - 構造主義・時枝論争・新手稿」, 2016年10

月23日, 東北大学(仙台)。

Hiroshi ABE, 「La subjectivité dans la narration au passé」, XXVIIIe Congrès International de Linguistique et de Philologie Romanes 2016年7月22日, ローマ大学(イタリア)。

阿部宏, 「バンヴェニストのバードレール解釈 - 時制をめぐって」, 日本フランス語フランス文学会ワークショップ「バードレール/バンヴェニスト - 詩学と言語学のはざままで」, 2014年10月26日, 広島大学(広島)。

阿部宏, 「疑似主体現象としての自由間接話法」, 日本フランス語学会シンポジウム「自由間接話法 - フランス文学, フランス語学, ドイツ語学の観点から」, 2014年5月24日, お茶の水女子大学(東京)。

〔図書〕(計4件)

平塚徹(編), 阿部宏他(著), ひつじ書房, 『自由間接話法とは何か・文学と言語学のクロスロード』, 2017, 99-142ページ。

川口順二(編), 阿部宏他(著), ひつじ書房, 『フランス語学の最前線3・【特集】モダリティ』, 2015, 329-357ページ。

澤田治美(編), 阿部宏他(著), ひつじ書房, 『ひつじ意味論講座 第3巻 モダリティI: 理論と方法』, 2014, 225-247ページ。

春木仁孝・東郷雄二(編), 阿部宏他(著), ひつじ書房, 『フランス語学の最前線2・【特集】時制』, 2014, 401-430ページ。

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

阿部 宏 (ABE, HIROSHI)

東北大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：10212549

(2)研究分担者

なし (0)

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()